



日本ラテンアメリカ学会 会 報



AJEL

1994年10月31日

AJEL

№51

1. 学会主催シンポジウム
2. 理事会報告
3. 学術・文化情報
4. 海外ラテンアメリカ研究センター紹介 (14)
5. 近著紹介
6. 近着会員業績
7. 事務局から

1. 学会主催でシンポジウム 古代文明の発掘をテーマに 科研費の補助を受けて

学会では12月13日、「アメリカ大陸の古代文明—メソアメリカとアンデスにおける日本人研究者の発掘と研究の成果—」をテーマにシンポジウムを開催することになった。文部省が今年度から科学研究費補助金（科研費）の一環として始めた「研究成果公開促進費」の案件として本学会提案のテーマが採択されたもので、会場は東京都港区の国際文化会館大会議場。大貫良夫、中村誠一、大井邦明、関雄二の会員4氏が社会人、学生などを対象に講演する。

今回のシンポジウム開催は6月中旬、文部省から突然、全国の学会に研究成果公開のための科研費を新設したので応募して欲しいと呼びかけてきたことから始まった。締め切りが数日後に迫っていた関係上、山田理事長が理事数人に語り応募したところ、4倍の競争を勝ち抜いて採択され、7月30日開催の学会理事会にて事後承認された。

テーマが一般の社会人にも広く関心もたれるものであったことが、見事選ばれた理由とみられ、文部省からは会場借料、消耗品費、

資料作成費などの直接経費として140万円が学会に交付される。会員4氏の講演テーマとプログラムは別表のとおりだが、参加希望者は学会事務局講演会係（住所は会報末尾参照）に、住所氏名を記入した返信用葉書を同封した封書で11月28日まで申し込んで欲しいとのこと。先着100人に入場印（無料）を押した葉書を返送することになっている。

山田理事長は「今回は時間的な制約があったため、緊急措置として理事長独自の判断で動いたが、今後は理事会で応募の可否を決めた後に構想を作るべきであろう。いずれにしろ今回の催しが成功すれば、引き続き他地域でも開催に努めるべきであると思う」と述べている。

シンポジウム：アメリカ大陸の 古代文明—メソアメリカと アンデスにおける日本人研究者 の発掘と研究の成果—

日時：12月13日（火）午前10時—午後4時
会場：国際文化会館大会議場（東京都港区六本木5-11-16）

10時：中村誠一「東南メソアメリカ周縁地域における考古学調査とその成果—周縁地域から見た古代マヤ文明盛衰過程の再構成—」

11時：大井邦明「マヤの大地土造成都市遺跡カミナルフユの発掘から」

13時半：関雄二「ペルー北高地の形成期と祭礼センター」

14時半：大貫良夫「文明と神殿—クントゥル・ワシ遺跡の発掘から—」

15時半：共同討論とまとめ

研究部会開催のお知らせ

秋の研究部会を行いますので、奮ってご参加下さい。

◇東日本部会

日時 1994年11月5日(土)14時-17時
会場 上智大学L-524 (中央図書館、5階北側)

発表者とテーマ

1. 岸川毅(上智大学)「メキシコにおける野党PANと企業家層の政治化」
2. 内田みどり(中央大学)「制度的改革は民主主義再生の切り札か——ウルグアイにおける政治制度改革論の系譜」
3. 竹内恒理(つくば国際大学)「OECD/開発援助委員会(DAC)における90年代の対ラテンアメリカ援助政策についての議論——民主安定化政策を中心として」

なお、上智大学図書館の受付では入館者のチェックが行われていますので、出席される方は別送案内状をご持参下さい。

◇中部日本部会

日時 1994年11月19日(土)14時-17時
会場 名古屋大学言語文化部1階会議室

発表者とテーマ

1. 鶴田利恵(名古屋大学大学院)「ブ

ラジルとEUの貿易関係に関する実証研究」

2. 小原雅彦(愛知県立津島高校)「1940年代のソモサ政権期におけるニカラグア労働者の動向」

◇西日本部会

日時 1994年11月19日(土)14時-17時
会場 立命館大学平和ミュージアム204号室

発表者とテーマ

1. 松本健二(大阪外国語大学非常勤講師)「アベル・ポッセ(アルゼンチン)の小説『旅人の長い午後』について」
2. 竹内史子(神戸大学大学院)「中米における政治変動サイクル——世界システム論からの一考察」

なお、次回以降は95年1月末と3月末に研究会を予定しております。発表を希望される方は、各部会の担当理事：東日本=畑恵子(tel、fax兼用0423-84-2070)、中部=二村久則(tel 0561-84-9641)、西日本=松下洋(tel、fax兼用052-763-5301)宛に、開催2カ月前までにご連絡下さい。(松下 洋)

2. 理事会報告

○第69回理事会

日時：1994年7月30日(土)
場所：上智大学
出席者：山田理事長、アンドラーデ、二村、

堀坂、石井、田中、畑(書記)(委任：三田、細野、欠席：松下)

1. 年報編集について

石井理事より次号は10月投稿申し込み締め切り、12月末原稿締め切りとする旨の報告があった。年報裏表紙の学会の英語表記

とロゴマークのスペイン語表記の略称が一致しないという問題については、統一せず
に現行のままとすることで了承された。出版
コストが膨張ぎみであるため、掲載論文
の抜刷を完全自己負担とすることが承認さ
れた。大会報告は年報に掲載しないこと
になった。

2. 運営委員を確認

以下のとおり承認された。

国際交流：幡谷則子

年報編集：野谷文昭・浜口伸明

会報編集：狐崎知己・浅香幸枝・安村直
己

研究部会：（東日本）田島久歳・谷洋之
（中部日本）加藤隆浩・小池
康弘

（西日本部会）小林誠、千葉
泉、松久玲子

事務局：安原毅

3. 次期第16回定期大会会場について

理事長より東京大学（駒場）での開催が
了承され、理事会からは畑が組織委員会に
参加することになった。

4. シンポジウム開催について

理事長より、文部省科研費研究成果報告
促進費への応募（「メソアメリカとアンデ
スの古代文明—日本人研究者による発掘と
研究成果」報告者：大貫良夫・大井邦明・
中村誠一・関雄二各氏）が採用され、12月
月上旬に国際文化会館で報告会を開催予定
であるとの報告があり、了承された（記事1
「学会主催シンポジウム」を参照）

5. 新入会員1名の入会を承認した。

3. 学術・文化情報

○第48回国際アメリカニスト会議 （ICA）に出席して

今回、国際交流基金から国際会議出席助成
を得て参加した第48回国際アメリカニスト会
議（Congreso Internacional de America-
nistas）は、「アメリカの脅かされる人々と
環境」をメインテーマに、去る7月4日から
8日まで、スウェーデンのストックホルム大
学とウプサラ大学を会場にして行われた。主
催大学によると、会議出席者はおよそ1500人、
参加国数は約40カ国である。ちなみに、日本
からは私を含めて2人が研究発表を行ったに
過ぎなかった。

主として、文化人類学、政治・経済・社会
学関係のシンポジウムがウプサラ大学、歴史
学、考古学、言語学、文学関係のシンポジウ
ムがストックホルム大学で行われた。会場が
二つに分かれ、両大学間の往復に2時間ほど
かかったため、関心のあるシンポすべてに参
加できなかったのが悔やまれる。しかし、前
回のニューオーリンズ、トウレーン大学での会
議と比較すると、研究発表予定者の無断欠席
も少なく、各シンポはほぼ予定どおり進行し
ていたようである。

会議は毎日、午前8時30分に全体会議が開
かれ、その後9時30分から午後5時30分まで
約12の部会に分かれて、シンポが開催された。
私の所属した歴史部会では8つのシンポが
開催された（合計で100を越えるシンポ）。
各シンポでの研究発表者の数は最大18人と決
められ、一人の持ち時間は30分であった。

私にとり、今回が6度目の参加だったが、
今回の会議が最も有益だった。前回同様、16
世紀の記録文書の解釈や土着史料の読み方
について管見を述べたのだが、予想以上に反応
があり、会議期間中、連日夜遅くまで、大勢

の研究者仲間と意見交換ができたのは大きな収穫だった。なお、今回は1997年、エクワドル・カトリック大学で開催される予定なので、本学会から会員諸氏が大勢、参加されることを念願し、報告に代えたい。

(染田秀藤)

○国際アメリカニスト会議の印象と

CEISAL 発足

7月4日からストックホルム(主会場)とアップサラで開かれた第48回国際アメリカニスト会議(Congreso Internacional de Americanistas)に出席し、ヨーロッパ地域の研究者との交流に努めた。この会議は、規約により、3年ごとにアメリカ大陸とヨーロッパのいずれかの都市で交互に開かれることになっており、今回は、1997年にキトーで開かれる。

脅かされている民族と環境がメイン・テーマであった今回の国際集会で目だったことは、その研究発表の豊富さ(プログラムは、変形11×21センチ版、251ページ)はさておき、ヨーロッパ地域内の研究者の交流の強化とそのため体制づくりであった。これも、欧州統合の進展の一つの表現であろう。スウェーデンでの会議に先だって、ワルシャワでプレコングレッションが開かれたが、その主なテーマは、中東欧におけるラテンアメリカ研究であった。

アメリカニスト会議では、欧州ラテンアメリカ社会科学研究所(CEISAL-Consejo Europeo de Investigaciones Sociales de América Latina)という組織の実務会議が開かれたので、傍聴に出かけた。この組織は、ユネスコにC部門のNGOとして登録されており、この会議を契機に本格的に活動を始めたようだ。この実務会議での決定として、毎年研究集会をヨーロッパ内の一都市(来年はサラマンカ)で開くことになっ

た。私は、今後本学会もこの組織との情報交流を維持し、われわれの代表がこの集会にオブザーバー参加したい旨を発言し、了承された。

私の発言のためか集会后、ヨーロッパ各国の学会代表が名刺交換を求めてきたので、挨拶し、今後の交流を約することができた。

そのほか、ストックホルム大学のラテンアメリカ研究所に年報と会員名簿(欧文表記になっていないことが悔やまれた)を寄贈し、過去2回のLASSA会議で面識のあったウェイン・カールソン教授からは、会議終了のちヨーロッパやキューバを含むラテンアメリカ各国の研究者とともにストックホルム郊外の瀟洒な自宅に招待され、婦人と妹さんの接待を受けた。北欧特有の白夜のためふと気がつくといつと10時をすぎていることに気がつき、冷涼な夕暮れのなかを電車と徒歩でホテルに戻った。

今回の集会は、緑と水に恵まれ、清潔で安全で整然とした都市景観をもつ「北方のヴェニス」の郊外にあるこぎれいな大学を会場として行われた。さらに参加者を喜ばせたのは、大学と歴史博物館、市庁などで毎夕のように開かれたレセプションであった。このために、ラテンアメリカ各国の大使館と市当局、政府などから財政的支援があったようだ。とくに、スカンセン公園では、スウェーデン民族舞踊とサルサとフォルクローレ演奏のアトラクションが催された。アメリカニスト会議も将来は規約を変えて、ヨーロッパとアメリカ以外の土地で国際集会を開く可能性もないわけではないようである。しかし、社会的な環境をも含めて、このような学会を開くことのできる都市が日本に果たしてあるだろうか、と自問しながら帰途についたのである。

(山田陸男)

○学術・文化情報は10ページへつづく。

4. 海外ラテンアメリカ研究センター紹介 (14)

ウィルソン・センター

Woodrow Wilson

International Center for Scholars

ウッドロー・ウィルソン国際研究者センターは、米国の首都ワシントンの中心「モール」を囲むスミソニアン博物館・美術館群の一角を占めるキャッスルと呼ばれる建物の中にある。

このウィルソン・センターは、研究者でもあったウッドロー・ウィルソン大統領を記念するため、広く世界から招いた社会科学・人文科学系の研究者・実務家に、米国の研究者・実務家を交えた自由な対話と論争の場として、1968年に設立された。予算の基幹部分を連邦政府予算で賄う準政府機関であるが、それによって研究テーマや内容が制限されることは全くない。

センターの中心的な活動は、毎年30人ほどの研究者・実務家をフェローとして招き、各人のテーマについて自由に研究する場を提供することである。それ以外に外部の研究者・実務家も聴講できるコロキウムやシンポジウムを開催したり、研究成果を出版したりラジオ放送で流したりといった活動もおこなっている。

センターは歴史・文化・文学研究部、国際問題研究部、米国研究部、地域・比較研究部に分かれており、このうち地域・比較研究部の中に、アジア・プログラム、東西ヨーロッパ・プログラム、ケナン高等ロシア研究所と並んで、ラテンアメリカ・プログラムがある。それ以外に諸研究部・プログラムを横断する大テーマとして、現在はエスニシティ、都市研究、統治の3つが設定されている。ただしフェローの採用は競争応募方式によっており、研究部・プログラムやテーマ毎に人数の割当があるわけで

はない。

ラテンアメリカ・プログラムには毎年2～4人のフェローが所属して、自由に研究を進めているが、プログラムとしては、一応「世界の中のラテンアメリカ」を90年代の大テーマとして掲げている他、「協調的安全保障」「開発モデル再考」「女性問題」などを重点的テーマとして、平均して月1回外部からの研究者・実務家も交えた研究会合を組織している。ただしプログラムの常勤研究者はディレクター（現在はジョゼフ・タルチン氏）と副ディレクターの2名だけであり、プログラム自身が特定のテーマについて研究を進めるといよりは、他の研究機関や民間組織と協力して研究の場を設定することが、プログラムの主な仕事になっている。

なお1993-94年に開かれた研究会合の中では、ラテンアメリカ各国の警察官・軍人を招いて2日間にわたって開かれた文民・軍警関係に関するシンポジウムと、世銀およびNGO連合組織との共催で開かれた開発戦略と貧困をめぐるシンポジウムが、最も大規模でかつ興味深いものであった。

住所：1000 Jefferson Drive SW,
Washington, DC 20560

(恒川恵市)

「海外ラテンアメリカ研究センター紹介は、会報41号に掲載した第13回の「スミソニアン熱帯研究所」（在パナマ）以来、編集の都合上しばらく休んでいましたが、海外での会員諸氏の活動がますます活発になっていますので、復活（不定期）させたいと思います。現地調査等で訪問したおりに寄稿をお願いします。（会報編集）

5. 近著紹介 田村さと子著『謎ときミストラル — ガブリエラ
・ミストラルの「死のソネット」研究』小沢書店、
1994年、209+CXLVII ページ。

紹介者：斎藤文子（東京大学）

メインタイトルだけをみると、一般向けの謎解き本のようなのだが、本書は、著者の20年に及ぶ資料探索の成果に基づく学位論文に加筆した、堅実かつ画期的な研究書である。

第2次世界大戦直後の1945年に、ラテンアメリカで最初のノーベル文学賞を受賞したチリの詩人、ガブリエラ・ミストラルは、15歳からすでに地方新聞に詩を発表しはじめていたが、その作品が広く国外にも認められるようになったのは、1914年に、当時チリの詩壇ではもっとも権威のあったフェゴス・フロラーレス賞を受賞してからである。

この受賞作の「死のソネット」三部作は、いわばミストラルの詩人としての出発点となったもので、代表作の一つに数えられている。彼女はこの三部作を中心に、同じテーマでいくつかの詩を書いており、いずれ一冊の詩集にまとめようと構想していた。しかしその計画は陽の目を見ずに、関連の膨大なテキストだけが未整理のまま残された。

棒線だらけのきわめて読みにくい下書きの自筆原稿、未完成原稿、清書原稿、発表するたびに修正の加わる公表作品など、詩集「死のソネット」としてまとめられるべく、詩人が何度も重ねた推敲の痕跡をとどめたテキストが、図書館、記念館や、個人所蔵として、ミストラルの死後、総括的な解明の光りを当てられることなく散在していたのである。

著者はこれらの「死のソネット」詩群の現在入手し得るすべてのヴァリエントを、何度も現地に足を運んで収集し、その過程でこれまで研究者に知られていなかった新たな手稿

二つを発掘、それらに総合的な検討を加えて、未完成に終わった「死のソネット」連作の創作過程を復元するという困難な作業に挑んだ。その成果が本書の中心部分を成す。

本書は4章に分かれている。I章はミストラルの生涯を概観するが、とりわけ「死のソネット」が書かれるきっかけとなったと見なされる、恋人のロメリオ・ウレタの自殺の前後の時期に焦点を当てている。

II章は「死のソネット」に関する先行研究の概説で、従来「死のソネット」として三部作だけが取り上げられることが多く、同じテーマで書かれた他のソネットの存在が論じられることはあっても、全体像を追及した研究に欠けていることを指摘する。

中でも著者が強調するのは、「文学研究であれ、科学的に資料を用いて証明してゆく手法がラテンアメリカでは確立していない……、引用した手稿の所在の明記、あるいは正しい資料の引用など基本的な研究方法が確立」

(12ページ)していない、というラテンアメリカにおける文学研究の状況である。本書のように、詩句中のコンマの異同を含めて厳密なテキスト比較を行ない、ひとつの詩の変成過程を追跡しようという研究態度にあっては、論文や研究書におけるこうした引用の不正確さ、原典明記のいい加減さ、あるいは実証に基づかない単なる憶測は、ひたすら混乱をもたらすのみである。著者は、なによりこの混迷にみちた偽テキスト群を振り分ける作業に取りかからなければならなかったのだ。

「『死のソネット』のテキストをよむ」と

題されたⅢ章は、散在する「死のソネット」作品群を分類、整理して、全部で12編のソネットを同定し、それぞれのソネットについて生成、変成過程を確定していったものである。ひとつのソネットに対し最大で13のヴァリエーションが発見されており、一字一句詳細に変遷を跡付けているのだが、たとえば冠詩を *una* にするか *la* にするか、あるいは *donde* か *en que* かの選択といった、ごく些細な、しかし詩の解釈には見逃せない、詩人の創作上の迷いなども明らかにされている。この部分の分析、解釈における著者の鋭い洞察力は、実作者として現在活躍中の詩人田村さと子ならではのものであろう。

ここで使われている諸テキストは、棒線を何本も引いた修正の跡も生々しい自筆原稿や、著者が新たに発掘した手稿も含め、すべて付録として本の後ろに掲げてある。

最後の「謎とき」と題されたⅣ章は、「死のソネット」のモチーフがどのように成熟し、生まれ、終息したかを、ミストラルの創作活動全体の中で考察したものである。Ⅲ章で確定された12編のソネットの順番、および成立年代の検討、全体の詩想展開の考察も行なわれ、既成研究が明らかにしえなかった、未完の連作の全貌が、本書によって初めて描かれ

ることになる。

死んでいった愛する者に対する生きる者の感情の変化を詠った「死のソネット」連作は、残された「わたし」の死者に対する愛着を詠うことから始まり、恋敵の女への嫉妬、あきらめ、追慕、そして最後はいつまでも生者を圧倒する死者への疎ましさと憎悪で終る。

なぜこれらの詩が、初めは一冊の詩集にすることまで考えられていたのに、完成されずに終わってしまったかについては、著者ははっきりした結論を避けているが、高度な技術を要するソネットを産み出すエネルギーが尽きてしまったこと、関心が「死のソネット」には納まらないところへずれていってしまったことを示唆している。

「死のソネット」三部作は、ノーベル賞詩人ミストラルの叙情詩の傑作と評されながら、その三部作を含む「死のソネット」詩群の存在についてはこれまであまり問題にされることがなかった。その全体像を初めて明らかにした本書は、今後ミストラル研究者にとって基本文献のひとつとなるであろう。その意味でも、現在進行中だというスペイン語訳が刊行されて、広く世界中の研究者に供されることが待たれる。

近著紹介 袖井林二郎・遅野井茂雄共著『アメリカのなかの南と北<クリントンの難問とフジモリの実験>』第三書館、1993年、122ページ。
紹介者：浅香幸枝（名古屋聖霊短期大学）

本書はアメリカをめぐる二つの南北問題を考えようとして著されたものである。クリントン大統領が直面する内なる南北の病理が何

であるのか、また、ペルーのフジモリ大統領が提示した大胆な改革は何であるのか、以上の二つを明らかにしようとするのである。一

見るとこの二つの問いは、脈絡のないもののように思えるが、実は共通の基盤があることが読み進むうちに分かる構成になっている。

口語文でまとめられており、一般の読者にも分かりやすく書かれている。最近のクリントン政権のハイチ侵攻や、大統領の再選をめぐるスサーナ夫人とフジモリ大統領の対立のニュースに接すると、なるほどこういう国内事情が背景にあるからなのだとなんか納得させられる本である。

アメリカ政治が専門の袖井は「クリントンの難問—アメリカ合衆国のなかの南と北」（1～66ページ）を、ペルー政治専攻の遅野井が「フジモリの実験—ペルーの民主主義の未来」（67～122ページ）を分担執筆している。両者による討論とか共同のまとめはない。読者が自分で考えるようになっていく。

「クリントンの難問—アメリカ合衆国のなかの南と北」で袖井は日本がまだ貧しかった1959年当時の圧倒的に豊かだったアメリカを振り返って、現在日本がアメリカに多額の金を貸すようになるとはだれも想像しなかったという。確かに1980年代後半以降の国際社会における日本の位置付けは、このことに尽きるといいのかもしれない。予想もできないほど世の中は変わっていくが、何がそしてだれが世の中を変えるのか考察を進めていく。冷戦後の混沌とした国際社会において、これは大変興味深い問いかけである。なぜなら、あれほどに打ちのめされた日本がこのあり様なので、これから何が起きるかわからないぞと好奇心をそそられるからである。この類推で、今おもしろいのがペルーの日系人大統領フジモリの改革なのである。このように興味をかきたてられて読者は先を急ぐ。

アメリカの豊かさにひかれてラテンアメリ

カなどからの違法滞在者が600万～800万人いると袖井は指摘する（日本には20万～30万人）。南北問題は別の言葉でいえば人種と貧困の問題という。人種問題を黒人に限定すると、奴隷解放政策は黒人を「解放」して都市のスラムへ追いやったにすぎない。農地改革が伴わなかったので解放されても経済的に自立できなかった。また、学校の「区別」が人種の「差別」を固定して再生産した。

アフーマティブ・アクションによる黒人の地位向上は、コミュニティーの崩壊と階層分化をもたらした。都会でドロップアウトするとアンダークラスへ落ち込んでしまう。安全な郊外に住む白人は黒人を救済するための福祉重視政策に反感をもっている。弱者の権利を認め、社会に本当の公正を貫き、平等を実現するというリベラルな考え方をネライ撃ちする風潮が広がっている。レーガン政権以来、金持ちはますます富み、貧しい人はますます貧しくなっていく。湾岸戦争をはじめとして、戦争に勝つことによって国民の支持を得ようとする点があることを指摘している。

一方、ペルーにおけるフジモリの実験は、1950年代にアンデスの貧農が都市へなだれ込んでペルーの難問が生まれたことに対する処方箋である。1968年のベラスコ革命は軍事政権にもかかわらず、農地改革をはじめとする大規模な社会・経済改革を行い、民衆を覚醒させ、権力の空白によりゲリラのセンデロ・ルミノソを生み出した。国家主導型の開発を選択し、財政赤字を生み、対外債務を拡大させて、1980年に民政移管した。「借金不払い宣言」のガルシア大統領もペルーの改革に失敗した。1990年、旧勢力不信と「Y E N」期待に後押しされて、「勤勉」「誠実」「テクノロジー」をスローガンとした日系人フジモ

リが大統領に当選した。他と連携しないことでフリーハンドを得て、既存制度を批判し、改革に口出しする立法府を解散し、可法府に改革のメスを入れたのだった。

センデロは農村から都市に出てフジモリの基盤を揺さぶったため、非常措置の強権発動をした。このペルーの最大援助国日本は、フジモリの強権発動に対してアメリカやEC諸国とは異なる対応をとり、援助を停止せず、民主体制の回復を促してきた。

現在の日本が世界に誇れることといえば、

国民間の貧富の差が比較的小さいことである。そのため治安もよいし、国民のやる気を維持しているといえるのではないか。世の中を変えようとするものは何かという問いに対して、紹介者は、貧困から抜け出し「人間」として扱われたいという欲求が世の中を変える原動力となっているのだと読み取った。また、貧富の差のある社会というのは、決して効果的な経済発展を遂げないとも考えさせられたのであった。

6. 近着会員業績

〔抜〕杉山三郎“El Templo de Quetzalcóatl en Teotihuacán: Su posible significado ideológico”, *Anales del Instituto de Investigaciones Estéticas* 62, Universidad Nacional Autónoma de México, 1991.

〔抜〕同上“Rulership, Warfare, and Human Sacrifice at the Ciudadela, Teotihuacan: An Iconographic Study of Feathered Serpent Representation”, *Art, Ideology, and the City of Teotihuacan*, Dumbarton Oaks Washington, D. C. 1993.

〔抜〕同上“Worldview Materialized in Teotihuacan, Mexico”. *Latin American Antiquity*, 4(2), 1993.

〔抜〕同上「メソアメリカ — 考古学事情」(『月刊文化財発掘出土情報〔増刊号〕最新海外考古学事情』ジャパン通信社、1994年)

7. 事務局から

1) 寄贈図書

〔冊〕『イベロアメリカ研究』第XV巻第2号
(上智大学イベロアメリカ研究所、1993年)

〔籍〕*Ibero Americana Nordic Journal of Latin American Studies (Revista Nordica de Estudios Latino-Americanos)*, Vol. XXIV:1 (Institute of Latin American Studies, University of Stockholm, 1994.1.)

〔冊〕*Cuadernos Hispanoamericanos*, 526, 527. (Instituto de Cooperación Iberoamericana, 1994.4.5.)

〔冊〕古山英二「メキシコ経済の現状分析」*The Conpas* (1994年9月号)

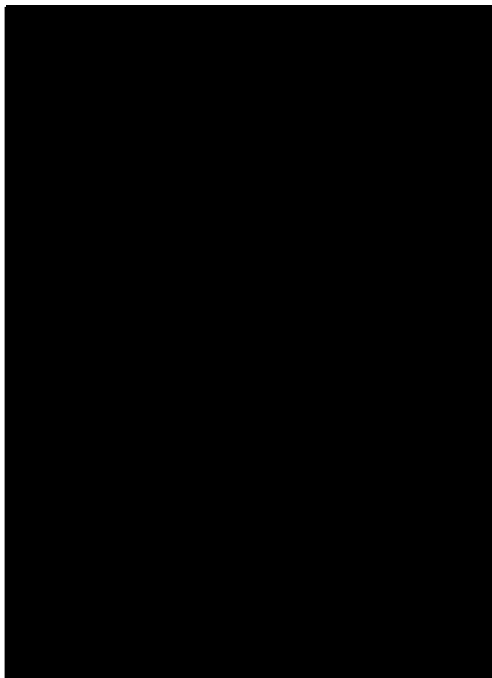
〔冊〕同上「OECD25番目の加盟国メキシコの実態」*The Conpas* (1994年6月号)

〔冊〕アジア経済研究所『ラテンアメリカ・レポート』Vol. 11, No. 3 (1994年)

〔籍〕Kobayashi, Munehiro. *Tres estudios sobre el sistema tributario de los*

Mexicos (1993.9)。〔なお筆者の小林致広会員から、この著書はメキシコで出版された関係上、筆者に連絡をもらえば原価+送料で送付することができるとの連絡がありました。自宅電話 0726-37-3644〕

2) 新入会員 (第69回理事会承認)



4) 会員名簿発行時、または発行後に変更のあった方や、名簿に修正のある方は、同封の修正表に掲載しています。(名簿に張り付けられるようになっていきます)

学術・文化情報 (つづき)

○上智でシンポジウム開催へ

上智大学イベロアメリカ研究所では、12月10日(土)に「貧富の格差に悩むラテンアメリカ—『失われた10年』に何が起こったのか—」をテーマに国際シンポジウムを行う。講師はメキシコから Jorge Castaneda (UNAM 国際関係教授)、ブラジルから Juarez Brandão Lopes (カンピーナス大学社会学教授)、コロンビアから Francisco De Roux (CINEP 研究所員) の3氏。さらに特別講演として

Centro de la Economia Cubana の Alfonso Casanova 所長がキューバの現状について報告することになっている。

このシンポジウムは、同研究所が1994年度の研究事業として行っている「ラテンアメリカの社会変動と階層分化」の一環として実施するもので、3カ国からの講演者の発表に続いて研究所メンバーがディスカサントとして討論に加わる。午前10時から午後5時までで、会場は中央図書館921号会議室。入場無料、同時通訳付。問い合わせは 03-3238-3530。

編集後記

アリスティッド大統領の復権問題は、米軍介入下の帰国という形でとりあえずの決着がつけられた。9月中旬に来日したコスタリカのアリアス元大統領はハイチ問題について、「国連安保理が主権国家の内政問題の解決に軍事介入を認めるとは、まったく信じがたい」と語ったが、コンタドーラに始まるラテンアメリカ諸国の和平イニシアチブが大きく後退したことは否めない。ラテンアメリカ地域の研究者にとっては実にやるせないことだが、米軍侵攻後を数日間沈黙を保ちつづけたアリスティッド氏の心情をせめて慮りたい。

11月後半には、昨年末に来日したハイチのNGOへの草の根援助を拡大するため、日本のNGOが合同調査団を派遣する予定と聞く。ラテンアメリカとの市民レベルでの直接交流も随分盛んになりつつあるようだ。

(狐崎知己)

No.51 1994年10月31日発行
〒466 名古屋市昭和区山里町18番地
南山大学ラテンアメリカ研究
センター気付
日本ラテンアメリカ学会事務局
☎ 052-832-3111
Fax 052-832-5490
(同大学国際課気付)